

## 金曜日の会 報告

- 1 期日 6月19日
- 2 場所 倉敷労働会館
- 3 参加者 O CH AK AS YO
- 4 内容

『世界でいちばんやかましい音』→展開(AR)、映像(AK)

『走れ』解釈(AS)

『風切るつばさ』(展開)

○運営委員会

・金曜の会 案内・報告(YO) 会場(O)

・例会 連絡・調整(AK) 案内・報告(AR) 全体調整(O)

○『世界でいちばんやかましい音』では、まず子どもたちが疑問に思う所を問診的に尋ね、解釈との整合性を考えながら、対立を組んで深めることができそうかななどの判断をすることが大切です。また、その時に『子どもが考えてみたいと思う問題かどうか』を自身で問い直してみる必要があります。

○また、問診の過程・結果から、子どもの意見が割れそうな所はどこか？子どものとりちがいやひっくり返せそうな所はどこか？をつかむことが大切です。そのためにも、文や言葉にきちんとつかなくてはなりません。また、『それがすっかり気に入りました。』の『それ』が何を指すのか？ここの解釈が重要です。『落ち着き』という内面的なものにつくことが、後の『平和だ』につながるのです。

○『走れ』では、問題がまだまだ表面的なものなので、教師がもう一步突っ込んで『そのどこがおかしい？』と、言葉に即して考えていけるような、より具体的な疑問にしなくてはなりません。また、子どものものを引き出すだけでなく、教師がよい発問を出していくのも手です。走っているのに、『走れ！そのまま、走れ！』はおかしいです。心は走っているが、体は走っていないのでしょうか。端から見ると歩いているようにしか見えないから、この一言が出たと考えられます。そして、35段落の『走った。』で、のぶよは初めて走ったのです。こう考えると、35段落の『走った』を違和感のある問題にして、変化ととらえることができます。

○『風切るつばさ』では、やはり展開上無理があることが分かりました。原因は、授業者が教材の論理を考えていないことです。クルルの体も空に舞い上がった原因は、17段落の『つき飛ばすように羽ばたいた。』の部分です。クルルにそんな力があるはずがないのに、この羽ばたきを生んだ原因は何なのか？子どもたちは『キツネに襲われそうなカララを助けるため』と考えるでしょう。そこで、『助けなきゃいけない存在なの？』と揺さぶり、15・16段落を読む展開が自然な流れだと分かりました。どうしても教師の論理に縛られて、子ども

の論理や教材の論理を無視してしまう所が、YOのまずさです。『つき飛ばす』で、よっぽど  
のことがないと、こんな力は出ません。以前、MO先生が言われた『よっぽど感』という言  
葉を思い出しました。もう一度、プランを考えてみようと思います。YO